

シンポジウム

オリンピア

—— 古典古代のからだところろ ——

趣旨説明・司会

橋場 弦（東京大学）

報告

佐藤 昇（神戸大学）

阿部 衛（東京大学）

納富信留（東京大学）

宮城徳也（早稲田大学）

コメント

木原志乃（國學院大學）

小池 登（首都大学東京）

全体討論

2020年6月6日（土）於 関西学院大学（後援）

主催 日本西洋古典学会

(趣旨) 古代オリンピックというテーマは、古典古代を現代に接続する数少ないチャンネルの一つである。ギリシア人・ローマ人は、古代オリンピックをどのように解釈し、受容していたのか。その背景には、どのようなイデオロギーや人間観が横たわっていたか。そして近代オリンピックは、古代オリンピックの理解にどのようなバイアスを与えてきたのか。東京大会を直前に控え、本シンポジウムはこれらの問題を哲学・史学・文学それぞれの視角から解き明かし、古代オリンピックという横断面に現れるギリシア・ローマ文化の相貌に光をあてようと試みる。さらには、全体討論をとおして、オリンピックが現代に投げかける問題にもなにがしかのアプローチができれば幸いである。

(報告要旨)

### 体育競技への眼差しと軍事

————— 変わりゆくギリシア世界の中で —————

佐藤 昇 (神戸大学)

体育競技とは、古代ギリシアの人々にとっていかなるものであったのか。後2世紀に『体育論』を著したフィロストラトスによれば、体育競技は元来、軍事と密接に関連するものであったという。事実、プラトンをはじめとする古典期の作品を繙けば、体育競技はしばしば軍事活動に準えられ、その有用性が各所で示唆されている。他方、前5世紀の悲劇詩人エウリピデスの作品では、ある登場人物が、体育競技祭の優勝者など戦場ではさして役に立たぬと批判を口にしている。Trundle 2004 はこうした体育競技批判に注目し、当時の軍事戦略・用兵術の変化が批判噴出の一因になったと主張する。すなわち、戦術が変化した結果、体育競技は前5世紀後半には軍事教練としての実質的有用性を失い、それ故にこうした批判が噴出するようになったと考えている。他方、Pritchard 2010 は古典期アテナイに焦点を絞り、体育競技はむしろ社会から強く支持されていたと主張する。前5世紀、広範な市民が従軍経験を持つようになり(軍事の民主化)、このため、軍事と類似した体育競技は彼らから評価、支持されるに至ったというのである。これらの研究はいずれも、古典期のギリシア人を自ら軍事活動に従事する市民=兵士と捉え、彼らが兵士の目線で体育競技を批

判・評価していたと想定している。

そのように考える場合、とりわけ興味深いのはローマ帝政期のギリシアにおける体育競技言説である。体育競技をめぐる言説は、先に言及したフィロストラトスも含め、後1～3世紀の数多くのギリシア語文献に確認することができる (cf. König 2005)。そして体育競技は、そこでもまた軍事と関連づけられることが少なくない。しかしながら、周知の如く、戦乱の絶えなかった古典期やヘレニズム期などとは異なり、ローマ帝国の支配下にあったギリシア世界では、市民たちに軍事的な活躍が期待されていたとはおよそ考え難い。そのような状況下において、体育競技と軍事はいかに関連付けて語られていたのだろうか。またその背景にはどのような歴史の実態があったのだろうか。本報告では、フィロストラトスやディオ・クリュソストモスなどの文献作品をとりあげ、作品中の体育競技言説と軍事との関係を分析するとともに、さらにエフェーボイ制度関連碑文なども利用しながら、歴史的背景について考察を進めてゆく。

### 帝国西方地域における運動競技の受容と変容

阿部 衛 (東京大学)

古代オリンピックをはじめとする競技祭の研究において、ギリシア時代、とりわけ古典期におけるオリンピア祭の実態の解明にこれまで極端に注目が集まってきた。その一方で、ローマ時代におけるオリンピア競技祭や運動競技が、議論の俎上に載せられることは、ほとんどなかった。それは、ローマ時代のオリンピア競技祭や運動競技が研究者の関心から外れたことや、史料的制約に起因する。このような背景から、オリンピア祭に代表される運動競技の祭典は古典期に最盛期を迎え、その後のローマ時代になると衰退したとの見方が一般的であった。

しかし、近年この説に多くの研究者から修正が加えられている。例えばローマ時代におけるオリンピックや運動競技については、参加者の出身地の多様化、皇帝による保護を根拠に、帝政期においても、その衰退は認められないことが示され、また、オリンピックとは疎遠と見られていた帝国西方においても、碑文や考古資料、遺構からギリシア式の運動競技が定着し、競技祭が開かれていたことが明らかにされつつある。だが、このよ

うな研究は緒に就いたばかりであり、議論の余地は十分に残されている。その一つに、従来の研究では、帝国西方社会における運動競技の浸透の過程についてほとんど議論がなされてこなかったことが挙げられる。

そこで、本報告では、ローマ社会における運動競技の受容と変容について考えてみたい。そして、考察に際し、運動競技とローマの見世物、とりわけ剣闘士競技や野獣狩りとの関係性に注目したい。一般に、文化の接触は、一方的ではなく、相互作用的である。それは、帝国西方から東方へと伝播した剣闘士競技においても認められ、帝国東方ギリシア圏は単に剣闘士競技を受容したのではなく、再解釈したという見解が示されている。具体的には、ギリシア圏の剣闘士の墓碑の内容は、帝国西方の剣闘士のものより、運動競技者のものと類似していたことが指摘されている。ならば、帝国東方から西方へ伝わった運動競技の場合はどうだろうか。ローマにおける大衆の娯楽であった見世物文化との接触を通じて、運動競技のあり方や、人々の身体観にいかなる変化が認められるのか、そして何が変わらなかったのか、検討したい。

### ソフィストたちのオリンピック

納富信留（東京大学）

古代のオリンピック祭典は、体育競技に特化されたものではなく、なによりもゼウス神に捧げる宗教行事であり、全ギリシアあがての文化行事であった。オリンピックに次ぐ地位にあったピュティア祭典では詩歌と音楽の競技が行われており、文化的性格が顕著であった。オリンピックにおいても、身体の徳・卓越性のアゴーンをつうじて、魂の徳の涵養と発揮が目指されていたはずである。また、「聖なる休戦」で有名なように、オリンピックは全ギリシアの民族祭典として平和と協和を象徴する政治的意味を担っていた。

プラトンら哲学者たちも、オリンピアを訪れて競技会を見学していたが、彼らの言説を見る限り、肉体の強靭さを知恵よりも評価するオリンピックに概して批判的であった。古くはクセノファネスのエレゲイア（断片2）やエウリピデスの悲劇（『アウトリュコス』断片）でオリンピック競技者への揶揄が表明されており、プラトン『ソクラテスの弁明』（36D-E）で

もソクラテスは自身のポリスへの貢献を競技会優勝者と比較して「プリュタネイオンでの食事」を提案している。身体上の優劣では人間の評価にはならず、『ポリテイア』の初等教育論が示すように、ムーシケーとギュムナスティケーは相俟って魂を涵養するものであった。

哲学者とは対照的に、ソフィストはオリムピックの祭典を自身の見せ場として最大限に活用した。オリムピック優勝者のリストを作成したエリスのヒピアスや、平和演説を行ったゴルギアス、リュシアス、イソクラテスらの活動は、オリムピックという場において成立する言論であった。直接オリムピック祭典に参加して発言した最初の三名と異なり、民族祭典を言論の場に設定して弁論作品『パネギュリコス』を書いたイソクラテスは、オリムピックの表象を活用することで自身の政治・文化理念を表明した点でより特徴的である。こういった競技場外の様子に目を配りながら、オリムピックの政治的・文化的・哲学的意義を検討したい。

(発表者は、橋場弦・村田奈々子編『学問としてのオリムピック』(山川出版社、2016年)「精神と肉体 オリムピックの哲学」で、哲学者とソフィストのオリムピックへの態度を論じた。今回の発表ではそこでの考察を踏まえつつ、さらに考察を発展させたい。事前にご参照いただければ幸いである。)

## ローマ文学に見られるオリムピック競技会のイメージ

宮城徳也 (早稲田大学)

ラテン語で書かれた文学作品で、オリムピック競技会を前提にした表現を含む現存最古のものは、キケロ (*Sen.*14) が引用したエンニウスの詩句か、プラウトゥスの喜劇 (*St.* 306) と思われる。ともにオリムピック競技会に言及している。エンニウスは戦車競技で活躍した馬、プラウトゥスは長距離走の選手を念頭においている。

キケロは、アッティクスに前 44 年の競技会の日程を尋ねており (*Att.* 15.25)、見学の意思があった。拳闘選手に「オリムピック競技会の勝利者」(*Flac.*31) の語を用い、同じ語が『トゥスクルム荘対談集』で名誉と死を論じながら、一族から 3 人のオリムピック競技会勝者を出した事例を紹介した箇所が使われている (*Tusc.*1.111)。同書ではオリムピック競技会の勝

利はローマの執政官職に匹敵すると言っており、後に栄光と名誉の喩えとして用いられることを想起させる (2.41)。『神々の本性について』では、実際の戦勝がオリンピア競技会で報告されたと言っており (N.D. 2.6)、同競技会が年代決定の目安となることを思わせる。『国家について』でオリンピア紀の起源とそれによるローマ建国年代に言及 (Rep. 2.18, 28, 38) している。

韻文作品でも、オウィディウス『黒海からの手紙』(4.6.5)、マルティアリス『諷刺詩集』(4.45, 7.40, 10.23) にはオリンピック紀への言及がある。また、ウェルギリウス『農耕詩』(3.49) には栄光の象徴として「オリンピアの棕櫚」への言及があり、ホラティウスもオリンピア競技会の栄光と名誉をその詩句に活かしている (Ep. 1.1.50)。

以上から、ローマ人見たオリンピア競技会には、(1) 有名な行事 (スポーツと宗教の祭典)、(2) オリンピック紀による歴史年代の目安、(3) 栄光と名誉の喩え、の3点が特に重要と思われる。他に考察したい問題として、ローマ人にとっての同時代のオリンピア競技会の意味と、古代後期のキリスト教作家がオリンピア競技会とどう考えたかの2点がある。前者に関しては、上記キケロの書簡の他に、スエトニウス「ネロ伝」において、ネロが同競技会に参加し、戦車競技で落馬したが、栄冠を得て、ローマ帰還後、それを披露した話 (22-25) があるが、他の事例にもあたりたい。キリスト教作家の言及ではアウグスティヌス、テルトゥリアヌス、イシドルスの言及を数カ所確認できたが、いずれも歴史年代と、栄光の比喩以上の意味は無く、可能なら異教の祭典への否定的見解を探してみたい。